

第 43 期会員総会開催

山崎記念農業賞は愛媛県松山市釣島（つるしま）集落に

7月22日、NTC コンサルタンツ株式会社会議室（東京中野区中野坂上ハーモニータワー20F）にて、第43期会員総会が開催されました。最初に会員総会（13:00～13:40）を行い、2016年度の活動経過報告と会計報告、2017年度の活動計画及び2017年度予算案について審議し、満場一致で承認されました。

総会に続いて山崎記念農業賞の授与式（13:40～14:20）が行われました。今年の農業賞は“愛媛県松山市泊町釣島集落に授与され、授賞式には、釣島町内会長の池本三嗣氏とJA釣島支部長の山岡建夫氏の2名が参加されました。

選考理由について渡邊事務局長から、選考過程について山路幹事からそれぞれ報告があり、集落を代表して釣島町内会会長池本三嗣氏から受賞者挨拶していただきました。農業賞選考理由については後段に記載しますが、個人や法人などではなく、集落を表彰するというのは山崎記念農業賞で初めてのケースになります。



受賞者；小泉所長を挟んで
釣島町内会会長池本三嗣氏（左）JA釣島支部長山岡建夫氏（右）



農業賞選考過程報告；山路幹事



受賞者挨拶；釣島町内会会長池本三嗣氏

記念フォーラム 14:30～17:30

＊＊瀬戸内海の小さな島「釣島」から本来の「農業」と「暮らし」を学ぶ＊＊

- ① フォーラム解題；山崎農業研究所 所長 小泉浩郎
- ② 「離島のマイナスを地域づくりの原動力に」 池本三嗣氏
- ③ 「柑橘で釣島を“宝の島”に（仮）」 JA釣島支部長 山岡建夫
- ④ 記念講演 「今、離島は元気」 NPO 離島経済新聞社代表 大久保昌宏氏

記念フォーラム

授賞式後、”瀬戸内海の小さな島『釣島』から本来の『農業』と『暮らし』を学ぶ”と題して記念フォーラムを開催しました。初めに、「フォーラム解題」として、小泉所長から釣島の概要と現状、課題等からフォーラムの論点を整理してもらいました。引き続き、町内会長池本氏から釣島の取り組みについて、JA 釣島支部長山岡建夫氏から釣島の今昔についてデータを交えながらお話していただき、最後に、離島新聞社の大久保昌宏氏に「今、離島は元気」と題して記念講演をしていただきました。

釣島集落の概況（池本氏、山岡氏のお話から）

釣島は、愛媛県松山市の沖合に浮かぶ有人島で、興居島（ごごしま）の西側に位置します。かつては半農半漁（とくにタコ漁）の島でしたが、タコがあまり取れなくなってしまったことや、採算性の関係から、今では柑橘類を中心とした農業の島になっています。昭和 30 年代のみかんの大暴落以後、宮内伊予柑、せとか、紅マドンナなどの多品種栽培に取り組み、温州ミカン産地との棲み分けを行うなど、安定経営の道を探ってきました。柑橘類の栽培面積は JA 全体ではこの 10 年間で 2/3 以下に減少しているなかで、釣島は栽培面積を維持しており、農家収入はむしろ右肩上がりになっています。

急斜面の多い島の農作業は容易ではありません。かつては天秤棒で収穫物を運搬したりしていましたが、島民総出で農道づくりを行い、今は全戸がテラー（農業用小型特殊車両）を保有しています。その他にも海水の淡水装置の導入など、生活や生産基盤にも積極的に取り組んできました。島外からは多くの釣り人がやってきます。観光資源としては明治 6 年に完成した灯台がありますが、船が 1 日 2 便しかないので、来島してから帰るまでの時間が長く、釣りをしない人にとっては暇を持て余してしまうのが難点だそうです。島には宿泊施設が無いので、休校になった小学校を宿泊施設に転用してはどうかという話がありましたが、いずれ再興を願って、廃校ではなく休校という形をとっているため、学校施設を他用途で使うのは制度上なかなか難しいようです。子供の教育のために隣の島に移住した若手後継者は、フェリー船で通い農業（通勤農業）している者も少なくありません。



釣島の位置図



農作業に向かう船上の若手農業者



天秤棒で運搬していたころ



自力施工した農道とテラー

記念講演；NPO 離島経済新聞社代表 大久保昌宏氏

離島問題、支援に取り組んでいる NPO 離島経済新聞社代表大久保昌宏氏に、各地の離島の様々な取組事例の紹介や、地域創造の観点から講演していただきました。大久保氏はもともとメディア業界、特に広告制作の現場におられました。その経験を活かし、「埋もれやすい島の営みを（外に）届ける」ための様々な取組、事業を支援してきました。活動の中で最も気を使っていることは、島の財産、資源を他所に収奪されるような事業であってはならないということだそうです。大久保さんたちの NPO も、一歩間違えれば島からお金をもらうだけもらって仕事をし、島に何も還元しないという危険性を常にはらんでいる。そのようなことは絶対あってはならないということを強調されました。



大久保氏の記念講演

山崎記念農業賞選考理由

山崎記念農業賞選考委員会

《贈呈対象》 釣島集落・愛媛県松山市泊町

《贈呈理由》

第 41 回山崎記念賞の選考にあたっては、会員からいくつかの候補が寄せられ、幹事会（農業賞選考委員会）で検討した結果、小さな島の条件不利な地域にあって、集落の力で島の特性を活かし、持続的に農業を営んできた釣島を第一の候補に挙げ、小泉所長、山路幹事 2 名で現地調査を行った。

釣島（つるしま）は、愛媛県松山市に属し、興居島（ごごしま）の西に位置する有人島で、周囲 2.9 km 面積 0.36 km² の小さな島である。江戸時代には松山藩の放牧場で、江戸末期に興居島から人が移り住んだのをはじまりに集落が形成されたといわれている。島の大部分を占める傾斜地は、かんきつ類の絶好の耕地となっており、島周辺は多くの釣り人が訪れている。半農半漁の島で、以前はタコが良く採れたが現在は漁業を営んでいる人はほとんどなく、農業が中心となっている。南斜面での果樹栽培が盛んで、なかでも"いよかん"や"せとか"、"紅まどんな"などの柑橘が多い。農家の果樹栽培にかける意欲は高いものの、釣島の耕地面積は限られているため、最近では近隣の興居島にも農地を所有し、船で出作している。

かつて、この島は、松山市から十数 km の海路だが定期船がなく（現在 2 往復）、無医村で、耕地は限定され、水は無く（週一回の水道船、最近やっと海水の淡水化装置が入るが、まだ飲料水以外は雨水依存）、乗用車の通る道もない。だが、全戸専業農家、後継者もその配偶者もいる。釣島の世帯数は 29 戸で、近年はほとんど変化がなく推移している。最近小学校が休校（いずれ復活することを願い、廃校ではなく、休校という形をとっている）、小学生を持つ所帯が家を残したまま島を離れざるを得なくなっても、本土や隣の興居島から「通い百姓」をしている。

小さな島で皆で暮らすという自治意識、世代（青年層・婦人層・高齢者層）ごとの活動、家庭内の世代間役割分担、最新技術の研鑽と継承（いち早い温州から伊予柑への転換など）、生活環境基盤（海水の淡水化による上水道整備等）やかんがい施設・農道などの生産基盤等の整備にも積極的に取り組んでいる。その結果、風土の恵みを活かした産地形成、世代を引き継ぐ家族農業経営に成功し、さらに島の歴史と文化に誇りと自信を持っている。

時代を読み話し合いを重ねてきた活動には、将来の我が国の農業・農村の姿が展望され、学ぶべき点が多く、ここに、さらなる発展を祈念して第 41 回山崎記念農業賞を贈ることとした。

2017 年度活動予定

2017 年度の研究会などの予定は以下のように計画しています。これらの研究会テーマは現時点で未定ですが、何か取り上げてほしいテーマ、課題等があれば、遠慮なく事務局に提案してください。また、開催曜日は基本的に土曜日としていますが、平日の開催提案の声もあります。開催日や開催方法などについてもご意見ご提案を御受けしたいと思います。

158 回研究会（現地研究会）	2017 年 10 月 中旬	テーマ；未定
159 回研究会（定例研究会）	2017 年 12 月～1 月	〃
160 回研究会（定例研究会）	2018 年 4 月～4 月	〃
第 44 期総会	2018 年 7 月 21 日（土）	

機関誌「耕」および電子耕の原稿募集

機関「耕」や電子耕をより開かれた広報媒体として活用していただくために、会員から広く投稿を呼びかけています。特集テーマなどは編集部から原稿を依頼していますが、会員の自主的な投稿も大いに歓迎します。内容は、農業や食料、環境問題だけでなく、その時々^の社会的出来事、政治、経済など範囲は問いません。山崎農業研究所の活動趣旨に沿うものであれば内容は問いません。提言、意見、研究発表あるいはエッセイ的なものでも構いません。

機関誌「耕」；文字数 1500～5000 程度

電子耕 ；文字数 800～1200 程度

投稿方法；特に問いませんが、編集作業の効率上、できれば電子メールで Word などのテキストファイルで投稿していただければありがたいです。なお、写真、図表などを使用される場合（機関紙「耕」のみ）はできるだけ鮮明なファイルを同封してください。

事務局員益永幹事は、6 月 30 日をもって NTC コンサルタンツ（株）を定年退職しました。今後のメール連絡は以下のアドレスをお願いします。

投稿先 ； E:mail yahiro_mas@hb.tpl.jp （益永個人メールアドレス）

E-mail yamazaki@yamazaki-i.org （事務局メールアドレス）

山崎記念農業賞基金の寄付募集

山崎記念農業賞は、会員の皆様からの寄付からなる基金で運営しています。昨年度は 26 万円ほどの寄付をしていただきました。ただし前々年度まで、しばらく寄付を募っていなかったこともあり、基金残金は十分な状況ではありません。山崎記念農業賞の主な支出は、授賞対象者調査費（主に交通費）、受賞者の旅費交通費（2 名程度）と表彰楯製作費です。

大変心苦しい限りですが、どうぞ山崎記念農業賞の趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。尚、山崎記念農業賞基金への寄付は別紙“払込取扱票”（郵便局）をご利用ねがいます。

会費納入のお願い

山崎農業研究所は、会員の会費や寄付で財政のほとんどを賄っています。会費納入率が昨年度は 83% でまだ十分とは言えない状況にあり、研究所の運営に支障をきたす要因となっています。まだ会費を納められていない会員におかれましては、是非会費納入にご協力くださるようお願いいたします。

入金先； 郵便貯金 山崎農業研究所 口座番号 00140-7-574121（振込専用口座）

みずほ銀行 普通預金 山崎農業研究所 四谷支店（036） 口座番号 8043304